

英国における高等教育教授システムについて

子 安 増 生 (教育学部)

1. はじめに

筆者は、1994年3月から1995年1月まで文部省在外研究員として英国に滞在し、発達心理学の調査研究を行なった。本稿では、筆者の垣間見た英国の大学における高等教育教授システムの一端について以下に報告したい。

現在、イギリスには95校の大学があるが、O'Leary & Cannon (1994) は、これを表1に示すような7つのタイプに分類している。この分類は、O'Leary & Cannon自身が述べているように「少し雑」なものであり、ただ1つのカテゴリーに属さない大学もある。ロンドン大学などは、アメリカのカリフォルニア大学 (University of California) と同じく、1つの大学というよりも独立したいくつかの大学の連合体という色彩が強い。

筆者は、イギリス滞在中に、ダラム、ヨーク、ランカスター、ケンブリッジ、オックスフォード、シェフィールド、ロンドン、ブリストル、サウサンプトン、ポーツマス、ケントの各大学を訪問する機会を得た。一口にイギリスの大学と言っても、1096年創設のオックスフォード大学や1209年創設のケンブリッジ大学のように中世の大学都市からの伝統を受け継ぐ大学もあれば、ヨーク大学 (1962年創設)、ランカスター大学 (1964年創設)、ケント大学 (1965年創設) のように、郊外にアメリカ型の広大なキャンパスを有する新構想大学もある。しかし、イギリスの大学の教授システムは、オックスフォード大学とケンブリッジ大学がつくりあげてきた教授システムによる影響が大きい。

周知のように、オックスフォード大学とケンブリッジ大学は、あわせてオックスブリッジ (Oxbridge) と呼ばれ、その卒業生はイギリスの政界・官界・学界などで大きな勢力をふるってきたが (Ellis, 1994)、コレッジ制度とチューター制度という2つの独自の制度を確立し、イギリスの他の大学の教授システムに多大の影響を及ぼしてきた。

2. コレッジとチュートリアル

オックスフォード大学は、黒死病の脅威から逃れてオックスフォードに住み着いた学者たちがつくり、13世紀にはユニヴァーシティ・コレッジ (1249年)、ベイリオル・コレッジ (1263年)、マートン・コレッジ (1264年) の各コレッジを次々に創設した。

他方、ケンブリッジ大学は、オックスフォードでの市民と大学人 (town and gown) との自治権をめぐる抗争から逃げ出してきた人々によってつくられたが、同大学最初のコレッジは1284年創設のピーターハウスであった。

オックスブリッジでは、教員も学生も必ずどこかのコレッジ (college) に所属することになっている。コレッジは、日本語でしばしば「学寮」と訳されることから分かるように、元来は大学人の生活のための拠点であった。したがって、コレッジには教員——現在ではコレッジに住む教員はごく一部にすぎないのであるが——や学生が寝起きするための住居 (accommodation)、遠隔地からの訪問者のためのゲストルーム、ホール (hall) やバタリー (buttery) とよばれる食堂、食後の団欒の時などに用いられるコモンルーム (談話室) といった居住施設が基本的なものとして備わっている。その他、図書室、視聴覚室、コンピュータ室などの教育施設、ラグビー・クリケット・テニスなどの専用グラウンドを含むスポーツ施設、そして宗教教育からスタートした名残りとしてのコレッジ・チャペル (礼拝堂)、さらにはコレッジの資産でもある広いメドウ (牧草地) などもコレッジを構成する重要な要素となっている。

しかし、コレッジは単なる「寮」ではない。それは、様々な研究分野の研究者、大学院生、学部学生を擁する一つの研究集団といってよい。たとえば、かつて皇太子浩宮が留学していたことで知られるオックスフォード大学のマートン・コレッジは、古典語学、英文学、歴史学、法学、数学、物理学、化学、生物学、生化学など21分野の学生253人を擁している (1994年度現在)。学生の多くは、コレッジの住居に住み、コレッジの各種の教育・文化活動に参加するが、昼間は自分の専門分野の学部等に行って授業を受ける。しかし、コレッジ自体もまたれっきとした教育機関であり、そこで行なわれる教育の中心にチューター制度 (tutorial) があるのである。

表1 イギリスの大学の7タイプ

〔古 風〕	〔テクノロジー〕	〔メトロポリタン〕
●アバディーン	●アストン	●ウェスト・オヴ・イングランド
●ケンブリッジ	●バース	●セントラル・イングランド
●エディンバラ	●ブラッドフォード	●ロンドン・ギルドホール
●グラスゴウ	●ブルネル	●コヴェントリー
●オックスフォード	●シティ	●デ・モンフォート
●セント・アンドリュース	●ダンディー	●ダービー
〔コレッジ制〕	●ラフバラ	●イースト・ロンドン
●ダラム	●ヘリオット＝ワット	●グラスゴウ・カレドニアン
●ロンドン	●UMIST	●グリニッジ
●ウェイルズ	●サルフォード	●ハダーズフィールド
●ヨーク	●ストラスカイド	●リーズ・メトロポリタン
〔赤レンガ〕	●サーレイ	●リバープール JMU
●バーミンガム	●アルスター	●マンチェスター・メトロポリタン
●ブリストル	〔カウンティ〕	●ネイピア
●ハル	●アングリア	●ノーサンブリア・アット
●リーズ	●ブライトン	●ニューカースル
●レスター	●グラモーガン	●ノッティンガム・トレント
●リヴァプール	●ハートフォードシャー	●プリマス
●マンチェスター	●ハンバーサイド	●ポーツマス
●ニューカースル	●キングストン	●ロバート・ゴートン
●ノッティンガム	●リュトン	●シェフィールド・ハラム
●クィーンズ・ベルファルト	●セントラル・ランカシャー	●サウス・バンク
●シェフィールド	●ミドルセックス	●サンダーランド
●サウサンプトン	●オックスフォード・ブルックス	●ウェストミンスター
〔キャンパス〕	●ペイズリー	●ウォルバーハンプトン
●イースト・アングリア	●スタッフォードシャー	
●エセックス	●ティーズサイド	
●エクセター	●テムズ・ヴァレー	
●キール		
●ケント		
●ランカスター		
●スターリング		
●サセックス		
●ウォーリック		

〔出典〕 O'Leary & Cannon (1994) の TABLE 1 より。

この点に関して、たとえばケンブリッジ大学に文部省在外研究員として滞在した数学者の藤原正彦（1991）は、次のように書いている（なお、藤原は「カレッジ」、「チュートリアル」と表記しており、以下の引用は原文のままである）。

「大学とカレッジは、前者が研究や講義、学年末試験などを総括し、後者が、大学生活に関わるその他全てを請負う、という点で相補的な関係にある。

カレッジは学生の生活面のみに関わる、と思うのは早計である。カレッジの本領は、教育面でも発揮される。各カレッジに属する教官（フェロー）が、そこの学生の教育を行なうのである。週に一度、学生は一名か二名単位で、各専攻科目について教官の直接指導を受ける。これはスーパーヴィジョン（オックスフォードではチュートリアル）と呼ばれる。数学専攻の学生だと、純粋数学と応用数学の二科目で、個人教授に近い指導を週に一度ずつ受けることになる。学生はここで、大学での講義や学習研究中にぶつかった疑問点を、解決してもらったり、自分の書いたレポートやエッセイをもとに教官と討議したりする。ケンブリッジ大学では、学生の主体的学習研究が重視され、講義は単なる方向付け位に捉えられているから、スーパーヴィジョンはケンブリッジ教育の枢要と見なされている。十九世紀に至るまでは、大学における講義はなく、全ての教育がカレッジにおけるこの方法に依っていた。これはかつて、上流階級子弟の初等中等教育が、主に家庭教師に依っていたことに連なっているが、現在でもカレッジにそのまま残っているのは、伝統を尊ぶという以上に、イギリス人の教育観、学問観を表しているのかもしれない。」（『遙かなるケンブリッジ』、75～76ページ）。

藤原（1991）は、短期間ではあるが、自身がケンブリッジ大学のクィーンズ・コレッジで学生のスーパーヴィジョンを行なった経験を記している。藤原のスーパーヴィジョンの対象は、数学専攻の2年生7人で、週に2人ずつ（前年度の試験の結果で同学力と判断される者をペアにした）を3コマ、1人を1コマ担当した。1コマ1時間で、水曜日の午後の約4時間がスーパーヴィジョンのために充てられた。その方法は、過去10年の学年末試験から8題ほどを選び、解答をレポートとして提出させ、それを添削して分からない部分を教えたり、質問に答える形式であったという。

このようなオックスブリッジの個別指導の起源は、オックスフォード大学ではじめられたチューター制度にある。この制度について、オックスフォード大学の最新の入学案内書（University of Oxford, *Undergraduate prospectus* 1995-1996, 8ページ）には次のように書かれている。

コレッジの教育——チュートリアル

チュートリアルは、1人または2人の学生が、自分の指定した科目のチューターと毎週行なう授業である。主任チューターは、学生と同じコレッジに所属する。チューターは、専門科目に関して他のチューター（学生と同じコレッジとは限らない）と授業について調整を行なう。コレッジのチューターの大部分は、大学で教える資格を有し、すべてのコレッジのメンバーに対して公開されている講義を行なっている。

学生は、チュートリアルでは、チューターが1週間前に示した様々な資料を読み、1週間勉強した結果を提示する。それは、小論文またはある問題の解答の形式をとる。チュートリアルは、学生自身の考え方を前進させ、ディスカッションを通してそれを発展させるよい機会である。チュートリアル・メソッドの成功は、ひとえに学生とチューターとの積極的な共同作業にかかっている。学生は、自分の意見を言うことを恐れず、率直な批判や忠告を受け入れる心づもりがなくてはならない。チュートリアル・メソッドの目的は、アカデミック・キャリアにとって本質的な特質であるのみならず、企業の求める資質でもある、自主的な思考の習慣を形成することにある。」

この内容は、前出の藤原の説明とほぼ同様のものである。ただ、オックスフォード大学では、学部学生に対しては「チュートリアル」、大学院生の論文指導には「スーパーヴァイズ」の用語を当てる点がケンブリッジ大学と異なっている。

また、藤原（1991）は前出の引用文の中で、「ケンブリッジ大学では、学生の主体的学習研究が重視され、講義は単なる方向付け位に捉えられている」と書いている。これは、オックスフォード大学でもまったく同じ事情である。次に、そのことをオックスフォード大学の実験心理学部（Department of Experimental Psychology）のカリキュラムによって以下に検証してみよう。

3. 学部の授業形態

イギリスでは、心理学は理科系の分野に数えられることが多い。オックスフォード大学の心理学部門は名称からし

て「実験心理学部」であり、その建物はオックスフォードの理系地区 (Science Area) に位置し、動物学部 (Department of Zoology) と共有のものである。学部段階での心理学のコースは3年制であるが、1年次の途中から純粋に心理学だけを学ぶコース (E P ; Experimental Psychology) と、心理学・哲学・生理学から2つを学ぶコース (P P P ; Psychology, Philosophy, and Physiology) の二手に別れる。

オックスフォード大学は、他の多くのイギリスの大学と同じくターム制、すなわち3学期制をとっている。オックスフォード大学の各タームの名称と、1994年～1995年の具体的なターム期間は次のようになる。

- ミクルマス・ターム (Michaelmas Term) : 1994年10月9日～12月3日
- ヒラリー・ターム (Hilary Term) : 1995年1月15日～3月11日
- トリニティ・ターム (Trinity Term) : 1995年4月23日～6月17日

学部の授業は、各8週間からなる3つのターム期間にしか行なわれない。実験心理学部で行なわれる授業の形態には、講義 (lecture)・セミナー (seminar)・実習 (practical) の3種類がある。

「講義」は、多人数の学生を対象に大きな階段教室 (lecture theatre) で行なわれ、その形式は日本の大学の講義と大差がないと言ってよい。しかし、授業時間割は1時間刻みで、たとえば「心理学入門講義」は木曜の11時～12時の60分授業となっている。この授業時間割には、移動のための休憩時間がまったく含まれていない。だから正味の授業時間は50分ほどになってしまう。50分授業を年間24回 (8週間×3ターム) しか行なわないのだから、トータルの授業時間は京都大学の通年の授業 (90分授業を30回が建前) よりも少ない。それを補うために、文献欄を充実したハンドアウト (授業の要約資料) を配付するといった工夫が行なわれている。

「セミナー」は、わが国の大学で通常行なわれている「演習」とはまったく性格を異にするものである。これは、ターム期間の8週間にわたって、大学の内外の研究者 (外国の研究者も含む) をゲストに招いて、その人の専門分野のテーマで講演してもらうものである。セミナーは小さな規模の演習室を利用して行なわれるが、時にはコンピュータ室などを転用して実施されることもある。オックスフォード大学は、イギリスの大学の中でもセミナーの種類が豊富なことで知られ、心理学分野では学部セミナー、実験心理学セミナー、発達心理学セミナー、社会心理学セミナー、比較文化心理学セミナーなど各種のセミナーが行なわれている。

藤原 (1991) はケンブリッジとオックスフォード両大学でのセミナー発表の体験を報告しているが、筆者もサウサンプトン大学、ロンドン大学 (MRC 認知発達ユニット)、オックスフォード大学、ランカスター大学、ケント大学、ケンブリッジ大学の6つの大学の心理学系セミナーにおいて、「幼児と成人の視点取得能力」というテーマで筆者自身の研究発表を行なった。その拙い発表体験と、筆者がセミナー受講者として参加した経験から、イギリスの大学のセミナーの一般的な形式をまとめると次のようになる。

セミナーは、多くの場合午後4時から4時半頃から約1時間 (余り) にわたって行なわれることが多い。これは、遠くからのゲスト・スピーカーが、朝自宅を出てその日のうちに着けるようにという配慮も含まれた時間設定と思われる。セミナーの前には、いかにもイギリスらしくティー・タイムが設けられている。ここでクッキーとお茶をいただきながら、簡単に自己紹介をする。セミナーそのものは、OHPやスライドを使いながら、約50分ほどで発表をし、その後10分あるいは時にはそれ以上をかけて質疑応答を受ける。配付資料はめったに配られない。また、質疑応答の内容は、アメリカ流の丁々発止ではなく、日本流のやや儀礼的な質問が多く、その意味では日本人にとって違和感が少ないと言えよう。

セミナー終了後、ワイン・レセプションが用意されている場合がある。討議の続きはワイン・グラスを片手にここで行なえるわけである。また、ゲスト・スピーカーは、セミナーの終わった夜のディナーに招待されるのが習わしである。まず市内のパブに行きビールで喉をしめらした後、その近所のレストランでごく数人の研究者・大学院生と食事をとりながら歓談をするという段取りである。

また、その日の宿は、頼めば主催者が手配してくれる。それはホテルのこともあるが、大学の宿泊施設の場合もある。余談になるが、筆者がケンブリッジ大学実験心理学部の伝統あるセミナーである「ザングウィル・クラブ」で発表した時には、筆者を招待してくれたウシャ・ゴスワミ博士 (Dr.U.Goswami) の所属するセント・ジョンズ・コレッジのゲストルームに泊めてもらうという願ってもない機会を得た。コレッジの中を流れるケム川にかかる「ため息の橋 (Bridge of Sighs)」を越えてさらに奥に入ると、由緒ありげな建物の2階にそのゲスト・ルームがあった。それ

は、応接家具が入った広いラウンジとそれに隣接するベッドルーム、それにバス・トイレ室が別に付く大変豪華な部屋であった（図1参照）。バス・トイレ室が三方に窓のある多角形の妙な構造だと思い、翌朝外から見ると、建物に付属する塔にその部屋が組み込んであるのだった（図2参照）。

話を元に戻すと、学生にとってセミナーは、専門分野の最先端の研究を聞くことができるという点では大変よいが、テーマが週替わりで全体として体系性がないという欠点をはらんだ授業形態と言えよう。

最後に「実習」であるが、心理学の分野では実習が重要であることは言うまでもない。オックスフォード大学実験心理学部の実習の中核となる「コア実習」を例にとると、それは火・水・木の週3回、毎回午後2時～5時に実施される形式であり、時間はたっぷり取ってある。ただし、筆者は実習の具体的授業内容や授業形式について実際に体験する機会がなかったので、これ以上のことを述べることはできない。

4. オックスブリッジの教授システムの現代的変質

以上に述べたように、オックスブリッジでは学部の授業の位置づけは必ずしも高いとは言えない。講義は授業時間が短く、セミナーは授業というよりは講演であり、全体としての体系性を欠いている。しかし、これを補って余りあるのが、各コレッジで行なわれているチュートリアルである。

チュートリアルの形式は前述の通りであるが、少し補足説明を行なっておこう。それは、誰がチューターになるかということである。イギリスの大学教員の職階は、プロフェッサー（professor）、リーダー（reader）、レクチャラー（lecturer）の3種類が基本である。プロフェッサーは、通常専属の秘書がつく一種の管理職で、日本の教授よりも権威があると言ってよい。スタッフが20名ほどの学部において2～3人しかプロフェッサーになれないし、一生プロフェッサーになれずに終わる人が少なくない。その次のリーダーも数からすると少なく、スタッフの大部分はレクチャラーである。レクチャラーの一部は、シニア・レクチャラー（上級講師）と呼ばれて区別されている。その下に、ティニャー（終身在職権）のつかないリサーチ・アシスタントが数名いる。リサーチ・アシスタントは、教授スタッフ（teaching staff）の中には含まれていない。

誰がチュートリアルを担当するかについて簡単にまとめると、次のようになる。プロフェッサーは、大学院生のスーパーヴァイズを担当するが、学部生に対するチュートリアルの義務を免除されている。したがって、リーダーからリサーチ・アシスタントまでがチュートリアルを担当する。この他、定年退職した名誉教授（professor emeritus）がチュートリアルを担当する場合がある。オックスフォード大学などでは、名誉教授にも研究室が与えられ、退職後も従前通り教育・研究活動が続けている人が多いという。

チュートリアルの担当者は、いずれかのコレッジに属し、同じくそのコレッジに属する学部生の主任チューターとなる。しかし、オックスフォード大学の入学案内書（前出）にも示されているように、所属コレッジ外の副次的チューターがつく場合もある。

ここでもう一度確認しておきたいことは、オックスブリッジのチューター制度がコレッジ制度と表裏一体になって発展してきたという点である。「コレッジ」の語源は、ラテン語で「同僚集団」を意味する「コレギウム（collegium）」であるとされる。キリスト教の宗教的戒律に従って独身生活を送る男性たちが、小規模の教師団と学生団を構成し、1つ屋根の下に起居を共にしてコレッジという生活共同体をつくりあげてきた。チューター制度は、このような緊密な対面的（vis-à-vis）集団における教授システムとして、最も優れたものの1つであったと言えよう。

オックスブリッジ以後に創設されたイギリスの大学は、何らかの形でコレッジ制度とチューター制度の影響を受けている。たとえば、1965年創設のケント大学は、カンタベリー大聖堂で知られるイングランド南東部の歴史都市カンタベリー市の郊外に位置し、遠目にも美しい大聖堂を遙かに見下ろす広大な丘につくられたアメリカ型の郊外キャンパスを有し（図3参照）、ケインズ・エリオット・ダーウィン・ラザフォードというイギリスの偉人たちの名を冠した4つのコレッジから構成されるが、それらはオックスブリッジのコレッジとは似ても似つかぬもので、多くの学部を収容する建物群の総称にすぎない。また、ケント大学は新設にもかかわらず評価の高い大学であるが、教員対学生比の関係から、オックスブリッジ的なチューター制度をとっていないという意味でも、コレッジの果たす役割は全く別のものとなっている。

筆者がケンブリッジ大学のセミナーでお世話になったレクチャラーのゴスワミ博士とケンブリッジのスーパーヴァ

イズのことに話した時、最近ケンブリッジ大学でも学生数が著しく増大して、1人の教員が20人以上の学生のスーパーヴァイズを行なわなければならない、週1回の面接という形式を崩さざるを得なくなっているのだと嘆いておられた。ケンブリッジ大学にしてこれならば、他の大学のことは推して知るべしである。

オックスブリッジ型のコレッジ及びチューター制度は、大学が少数の選ばれた者のために存在した段階ではきわめて有効であったが、アメリカの社会学者マーチン・トロウ（邦訳1976年）が言うように、高等教育がエリート高等教育システムから、マス高等教育システム（大学進学率が15パーセント以上）、ユニバーサル高等教育システム（大学進学率が50パーセント以上）へと発展して行くと、その維持がきわめて困難になるのである。この点について、トロウは次のように述べている。

「エリート高等教育のもとではチューター制やゼミナールが特徴的な授業形態であり、そこでは教師と学生の人間的つながりが強調される。この段階の大学に期待されるのは、広い視野をもった、つぶしのきくエリートの養成機能である。（中略）高等教育がマス段階に入ると、教育の主眼は技術と知識の伝達に移る。そして正規の授業は大教室で行われる講義形式をとり、それを教育助手が担当するゼミナールが補うというのが一般的な形態となる。ユニバーサル高等教育の場合には、学生に新しい、より複雑なものの見方をはば広く身につけさせることが教育の中心となり、教師と学生の直接的な人間的つながりは従となる。またそこでは通信教育、ビデオ・カセットやTV、コンピュータなど、新しい教育工学的な教育形態が積極的に活用される。」（天野・喜多村訳、67ページ）

オックスブリッジの両大学とあわせて「黄金の三角形（golden triangle）」を構成すると言われるロンドン大学は、ユニヴァーシティ・コレッジ（1826年創設）やキングズ・コレッジ（1829年創設）など多くのコレッジやスクールの連合体であるが、学生数を見るとユニヴァーシティ・コレッジで約1万人、キングズ・コレッジで約8,300人であり、また両コレッジとも多くの学部から構成されており、1つのコレッジが単独で1つの総合大学であると言っても差し支えない。ロンドン大学は、大都市ロンドンの中心に大型の建物を擁し、オックスブリッジで比較的軽視されてきた工学部教育を充実するなど、高い質の教育・研究を展開しながら、大学の大衆化路線を走ってきたのである。

問題は、大学の大衆化のみにあるのではない。学問研究の現代化にともない高等教育に求められるものも変質し、チュートリアル中心のオックスブリッジ型の「手作りの教育」を時代遅れにしているという認識がある。現代の学問研究においては、個別科学の狭い領域を深く研究すること（専門化）、1つの研究テーマに専門を異にする多くの研究者が役割分担をしながら参与すること（分業化）、研究の方法が個人の特技や技能を越えた技術として確立されていること（技術化）、研究から得られた知識がデータベースの形で蓄積されていること（集積化）などの進捗が著しい。チュートリアルによる手作りの教育は、このような問題に対応することのできる能率のよい教授システムではない、と考えられているのである。

このような考え方は、先に述べたロンドン大学の方向性に明確に見られるのであるが、オックスブリッジの内部でも、特に理科系の学問分野で、近年ずっと論議されてきたことである。コレッジのチュートリアルと学部の授業（講義・セミナー・実習）という2本立の教授システムは、いわば両者の妥協の産物であると言えよう。

5. 高等教育システムにおける事効論と人効論

それでは、チュートリアル制度は、現代の高等教育の教授システムとしてもはや時代遅れになったのであろうか。筆者は、必ずしもそうは思わないのである。

第1に、人文科学系、社会科学系の分野には、なおチュートリアルのような手作りの教育を必要とする研究分野が存在する。たとえば、古典語学や歴史学のような分野は、肌理細かな個別指導によって後継者を養成することが必要な分野であり、大量生産システムには乗っからないものと思われる。

第2に、チュートリアル制度そのものは、長期間にわたって巨額の独自資産を形成し蓄積してきたコレッジ群という、オックスブリッジに固有の制度と表裏一体のエリート志向的教授システムであり、容易に他の大学の追随を許さないものであるとしても、そこに流れている教育観や学問観は様々な形で現代の高等教育教授システムに継承すべきものであろう。この点について、以下に私見を述べることにしたい。

些か唐突かもしれないが、西洋史学の泰斗・堀米庸三（1964）の名著『正統と異端』に出てくる、ヨーロッパ中世のキリスト教会における「人効論」と「事効論」の論争の話がこの問題を考える1つの手がかりになるように思われ

る。カトリックでは、誕生後に入信させるための洗礼 (baptism)、この入信を完成させるための堅信 (confirmation)、聖職位を授与する叙品 (ordination) などの儀式が行なわれる。中世の時代、この儀式を執り行なった聖職者がその後罪を犯してその地位を失った時、その瀆聖の司祭者が既に行なった各種の儀式が無効か (再度儀式を行なう必要があるか) どうかという議論が激しく闘わされた。人効論は、「エクス・オペレ・オペランティス=為す人の業により」という考え方で、司祭者がその資格を失えば、彼が行なった儀式は無効になるという考え方である。これに対し、事効論は、「エクス・オペレ・オペラート=為されたる業により」という意味で、一度刻みつけられた「主の印」は未来永劫消えることはないとするものである。

いわゆる異端派は、カトリックの司祭者の墮落や腐敗を攻撃し、人効論に立って儀式のやり直しの必要性を主張した。他方、カトリック教会は、儀式のやり直しによる混乱を避けるためにも事効論に立ち、一度成立した儀式の効果の永続性を主張した。長い論争と闘争の結果、人効論は異端の論として排斥され、事効論こそが正統の論と定められた。

いま仮に上のような考え方を現代の高等教育に当てはめると (学問の世界にも、正統的学説と異端的学説がある)、誰が教えるかにかかわらず、個別の学問が必要とする体系的知識・技術を学生に組織的、効率的に伝達する制度なりシステムなりを確立することが最も重要であるとする「事効論」は、正統的な教育観と言ってよいだろう。このような正統的見解にはそれなりの強みがあって、教授者一人一人の言動に左右されない研究・教育システムを確立した大学は強いと言える。しかし、高等教育においても、「誰が教えるか」ということが無意味であるわけでは決していない。どのような学問分野であれ、教育の場で教える者の人格の影響力が皆無ということとはありえない。教育には常に人格形成の側面があり、「人効論」の考え方を無視するわけには行かないのである。

問題は、事効論的考え方でシステム化されつつある現代の高等教育の教授システムの中に、人効論的要素をどのように維持し、あるいは新たに取り入れるかにある。そして、このことこそが、現代の高等教育の抱える最も重要な課題の1つであると筆者は考えるのである。オックスブリッジのチュートリアル制度とそれを支えるコレッジ制度は、この意味では現代社会においても決して色褪せたわけではないと言える。

〔引用文献〕

Ellis, W. 1994 *The Oxbridge conspiracy: How the ancient universities have kept their stranglehold on the establishment*. Michel Joseph.

藤原正彦 1991 遙かなるケンブリッジ 新潮社 (新潮選書)。

堀米庸三 1964 正統と異端——ヨーロッパ精神の底流 中央公論社 (中公新書)。

O'Leary, J., & Cannon, T. 1994 *The Times Good University Guide 1994-1995*. Times Books.

トロウ, M. (天野郁夫・喜多村和之訳) 1976 高学歴社会の大学——エリートからマスへ 東京大学出版会 (UP選書)。

〔図の説明文〕

図1 ケンブリッジ大学セント・ジョンズ・コレッジのゲストルームのラウンジ。

正面のドアの奥にバス・トイレ室がある。

図2 ケンブリッジ大学セント・ジョンズ・コレッジのゲストルームのある建物。

筆者が泊まったのはこの建物の2階で、バス・トイレ室は左側の塔の中に組み込まれている。

図3 ケント大学のキャンパスの丘からカンタベリー大聖堂を眺めたもの。

图 1

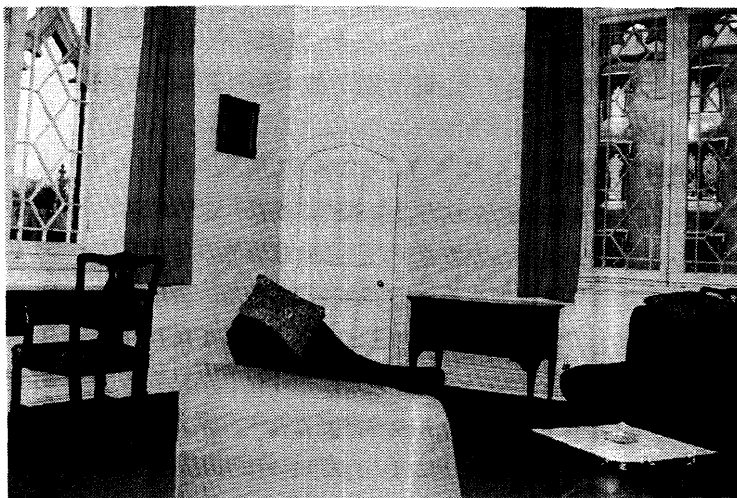


图 2

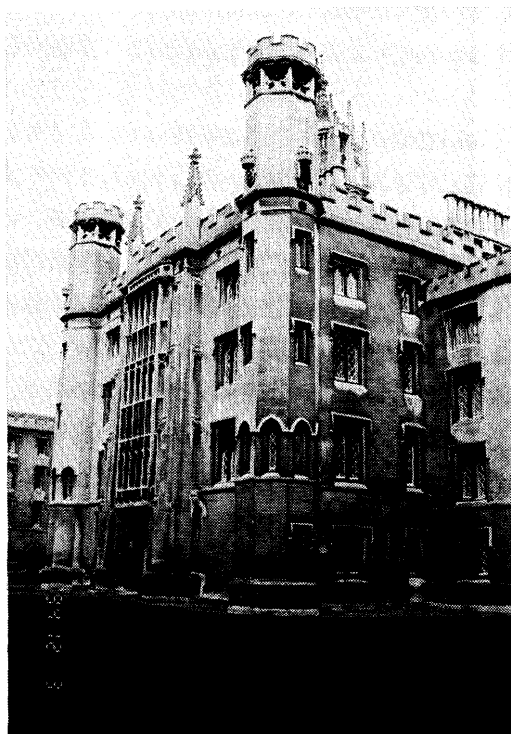


图 3

